

「地域特産品開発と遊休農地活用」

大鹿村中尾早生生産組合

中尾早生の生産振興

山間部の多い大鹿村では、古くから大豆は重要な作物で麦の二毛作や楮の間作として栽培されていました。

村の農地の大部分が標高 800m 以上の高冷地であったため早生の品種が栽培され、飯田周辺ではみそづくりに大鹿村の大豆が使われていました。

大鹿村の中でも、中尾集落で栽培されていた大豆が「中尾早生」とよばれ小粒でタンパク質が多いため評価が高く、当時は愛知県まで移出されていました。

中尾早生は、戦後しばらくの間、村のいたるところで栽培されていましたが、優良大豆の普及や栽培農家の減少などにより、年々生産量が少なくなると同時に、いろいろな品種と混ざり、本来の中尾早生がわからなくなっていました。

かつて村の主要品目であった在来種「中尾早生」の栽培は数戸の農家による自給的な取り組みが中心であり、生産量は極めて少ない現状であると同時に、生産される子実も長年の自家採種による形質のばらつきや特性の退化、また異品種の混入が指摘されていました。

そこで、「中尾早生」の復活・生産振興と品質確保のため、平成11年度から15年度にかけ系統選抜を繰り返し、最終的に「中尾早生」の固定を行いました。

現在は、遊休農地等を利用し大豆の栽培促進と、豆腐等の商品化による地域特産品開発の振興を図っています。



生育期



成熟期



精子実

【報告：下伊那地方事務所農政課、下伊那農業改良普及センター】